

メキシコの水郷ショチミルコ

研究第2部主任研究員 河野嘉仁

メキシコシティーは標高2240mの高地に位置し、平均気温15.1度、年降水量は726mmである。メキシコ盆地のなかにつくられたこの都市は、200万台もの自動車、製油所、常に発着する飛行機等から出される排気ガスは盆地の中に停滞し世界でも指折りの公害都市の一つである。排気ガスだけでなく、内陸の盆地ということで自然排水出来ないため、盆地中央のテスココ湖は塩水化している。年間約13億トンを超える水需要の内2/3を盆地の中で賄っているが、それは域内の河川、湧水からと地下水のみみあげにより賄われている。生活用水の確保にも苦勞をしている現在では、都市内部の緑地管理にも支障を生じており、都市内緑地も少しづつ減少化をたどっている。

市域南部のショチミルコ帯は、かつてメキシコ盆地一帯が湿地帯であったなごりを残す運河地帯である。古くから伝わるチナンパという「浮き菜園」で知られている。このチナンパ地帯は清澄な湧水にめぐまれ、首都の住民に飲料水や野菜・花卉類を供給し休日には舟遊びの場を提供する水郷地帯であった。しかし現在では排水不良のため、雨季には2ヶ月以上も異常水位が続くようになり、1977年には5000haものチナンパ耕地が水没した。さらに周辺部にある製紙工場の廃水、生活雑排水の流入により富栄養化し、とても清澄とはいえない現状である。それでも休・祝日には都市部からレクリエーションを楽しむ家族連れやグループで賑わっており、メキシコシティーにおいてはまだ1級の行楽地のひとつである。

内水面のレクリエーション地であるショチミルコを是非見たいと考えていたので、今回の海外研修は是非ここにしようと考えていた。

昭和63年11月5日、成田空港からロス・アンゼルスを経てマイアミへそこで4日間、又、そこからユカタン半島の先端にあるカンクンに於いて、3日程マリリゾートの現況を見た後、メキシコ・シティーへと向かった。

空から見たメキシコシティーは2千万人近い大都市に相応しく、見渡すかぎりの町並みが、排気ガスで覆われた中に果てもなく続いている。空港に着くと、排気ガスのせいか目がチカチカとしてくる。到着初日はまちの概要を知るためにツアーに参加し、首都をぐるっとひとまわりし、翌日はタクシーを雇ってショチミルコへ行くこととした。ホテルの前にたむろしているタクシーの中から、なるべく人のよさそうな運転手をえらびだし値段の交渉、ショチミルコ以外にも2、3ヶ所をめぐるコースで折合い、早速ま



メキシコシティー市街地、2000万人を越える大都会で世界でも有数の公害都市である。



何キロメートルも続く運河をいくつものボートがゆったりといきかう。

ちへ飛出すことにした。メキシコのタクシーはアメリカ製の大型のもので比較的きれいなものと、かぶとむし型のワーゲンで、床のマットは無く、扉も満身に閉まらない凄まじいものまである。私達が乗ったのは後者の方で、助手席はお客の出入りの為に外してあり、運転手を含めて3人乗りに改造してあった。それがワーゲン独特の音を響かせて走りだした時には少々恥ずかしかったが、10分もたった頃には馴れてしまった。

メキシコシティは大都市である。排気ガスをまきちらしながら40分位走ってもゴミゴミした町並は変わらない、それでも人の数と駐車している車の数が増えたなと思ったら、突然、堀り割のそばで車がとまった。堀り割の方を見ると、かつて写真で見たことがある通り派手に彩色された小舟が舟だまりの中にとこせまじと並べられていた。車を降りると、ブローカー風の男達が寄ってきて値段の交渉を迫ってきた。彼等の間をすりぬけながら、舟の値段をききまわり、一番安い値段をつけたところで妥協し舟に乗りこんだ。

舟だまりをスタートしたのは午前11時頃でまだ行楽客も少なく、堀割を行交う舟も疎らで、マリアッチを演奏する楽団の舟も開店準備の音合せの最中であつた。雇った小舟は余り広くはないが、区画整理後の道路のように真直ぐに伸びた水路をゆっくりと進んで行く。所々で他の水路と交差している。まだ若い船頭は自分の町の界隈を散歩でもするかのように好き勝手に舟を進めて行く。玄関を運河にむけている家屋も多く、玄関から続く階段が直接運河に伸びている。そこで洗い物をしているおばさんや荷物を舟に積込んでいるおじさんがいたりする。また小舟に草を山盛りに積んで運んでいる少年や、牛乳の缶を積んで運んでいる家族づれとすれちがうなど、日曜日でも午前中の運河は日常の生活をそのまま映しだしている。私達の若い船頭は気軽に彼等と挨拶を交わしながらその間をスムーズに通り返して行く。昼頃になると、運河の中をゆったりきたりする行楽客をのせた舟の数も増加し始め、それに合せて楽団の舟、物売りの舟、食べ物、飲物売りの舟や写真屋の舟が入交って狭い運河の中はおおにぎわいである。それでも運河の中は右側通行で整然と運行されており、陸上のような慌しさは感じられない。楽団が奏でるマリアッチを聴きながら小舟に揺られていると現実の煩わしさから解放されたようにのんびりしてくる。ただし水はきたない。富栄養化が進みつつある現状がよくわかる。除々に沼地化



所々に休憩が出来る広場があり、行楽客はおりて散策をする。



行楽客と物売りの船で広い運河も狭いくらいに感じる。



小船をチャーター出来ない人々は乗合の船ののって遊覧する。この程度の船でもモーターはついておらず、2名の漕ぎてにより進む。



から湿地へと移行し、このままでは陸地化してしまい、水の都の様子は文献の中の文章と写真に残されるだけになってしまうだろうと、少々寂しい思いで行交う小舟をみつめていた。